

金光教の声

(平成21年4月～6月放送分)

目次

花の咲く音（鳥越）正克	3	柱とのれん	32
夫婦の算数	7	水の恩	37
笑顔のワケ	10	神経質／神様のおかげ	42
夏休みの体験	14	めげない心／祈りの姿	46
君も家族だよ	18	夫婦円満／めぐり合わせ	51
よい方をあげよ	22	立教150年／神の立場・神の思い	55
当たり前前って、当たり前前？	27		

*7ページ以降は金光教放送センターが執筆

鳥越 正克

「ほら、夕顔が咲いたよ。ポンと咲いたね」。母は庭の夕顔を見つめたまま、無邪気に言いました。私が小学4年生の時、母が入院する前日の夕暮れでした。50年も前のことなのに、その時の情景は今でも鮮明に浮かびます。

私の母は四国の高知から九州の父の元に嫁いで来ました。そして兄と私と弟の、男の子ばかり3人を授かりました。母は産まれつき体が弱く、嫁いでも炊事の途中に気を失い、よく土間で倒れました。その度、父が背に負い、町医者に担ぎ込んでいまし

た。朝早く、土間をせわしく歩き回る下駄の音や、ネギを刻むまな板の音が聞こえると、子ども心にも安心したものです。

4年生の夏休みに入ってすぐのこと、私たちを前にした母が「お母さんは明日から入院して、手術をすることになったの。お母さんが家にいない間、お利口にするのよ。そしてお父さんの手伝いをしてね」と言いました。子宮筋腫でお腹を切り、今年の春に退院したばかりの身で、さらに、バセドー病で喉（のど）を切るといふことの重大さは、子どもの私にも理解出来ました。

なのに母の面持ちは、まるで旅行にでも出掛けるように、にこやかでした。それがかえって、母の寂

しさを思わされました。

その日の夕暮れ時に、母の「早くお庭に来てごらん。夕顔が咲くよ」の声に誘われた私は、縁側に腰掛けていた母の肩にもたれ掛かるようにして座りました。

その私を母は、左腕を回して「ほれほれ」と言いながら、胸に抱くように強く引き寄せました。いきなりのことに「お母さん恥ずかしいばい」と言ったものの、うれしくてなりませんでした。その時、母の胸元から、ほんのりと天花粉の香りがしました。

夕食の後、父が神妙な顔つきで、「お母さんは朝早く家を出るから、みんなで送り出すぞ。今夜は早く寝なさい」と言いました。その日はいつもより早

めに寝ることになりました。寝室に張った蚊帳の中で、私たち三人は、いつものように川の字になって寝ました。すぐに寝付かれない私は、兄と、「手術は痛いのだろうか?」「遠くの病院へはどうやって行くのだろうか?」「お金はあるのだろうか?」などと話しているうちに、いつしか寝入ったのでした。

夜中に物音で目を覚ました私は、部屋の中に小さなお月様を見ました。目を凝らすと、それは、押し入れを照らす、懐中電灯の明かりでした。寝ている私たちを気遣いながら、母が押し入れの衣類を整理していたのでした。

灯りが私の顔を照らし、「起こしてしまったね。ここにおいで」との声がしました。母のそばにはつていくと、私をひざに乗せて抱き締め、衣類の場所

を説明する間、ずーっと頭をさすり続けてくれました。
た。

あくる朝、目を覚ますと兄の姿はすでに無く、弟も起きていて、蚊帳の片隅でしくしく泣いていました。「しまった！ 寝過ぎした」と思いましたが、土間から包丁の音がしたのでホッとして「お母さん！」と声を掛けました。すると「みそ汁が出来たぞ、温かいうちに食べなさい。お兄ちゃんは隣町まで、お母さんに付いて行ったぞ」と、父の声が返ってきたのです。

途端に悔んでも悔やみきれず、悲しくなつて泣いて泣き疲れて、その場に寝込んでしまいました。当時、我が家には電話を引いていませんでした。向か

いの家に掛かってくる母からの電話を取り次いでもらうことになっていました。

母からの電話があれば、あのこともこのことも話そうと楽しみにしていましたが、果たせませんでした。それは、久しぶりの母の声に胸が詰まったことと、生まれて初めて受話器を握った緊張で、何も言えなかったのです。その上、その家のおばさんが「電話代がかさむから、もう切りましょうね」と言つて、さっさと切ってしまったのです。それっきりの電話でしたが、母の「お利口になっていますか」の言葉と、声の響きだけは今も耳に残っています。

私がお利口にしていなかったせいなのか、秋風の吹くころに、ようやく母は帰ってきました。

その後も、母の入院手術は13回に及びました。でも、手術のつど、母は「毎日が奇跡ね。神様は何の取りえのない私でも何とか生かしてやりたいと、ご苦労下さっているのね」と、輝きながら77歳の人生を終えました。

死後、母の日記の中に「信心の花咲く手術台の上」と詠んだ俳句が残されていることを、兄から知らされました。

俳句には、手術台という苦痛と不安の極限の場においてさえも、生きている今に感謝している母の、生き方が読み取れます。

残された命が例え一瞬であっても、その一瞬をいとおしみ「今が最高！」と生きてきた母。小学生の私に、「夕顔がボンと咲いたね」と言ったが、あの

時、確かに母は、命の歓喜の音を聞いたに違いありません。

早いもので、今年は母の5年の節目を迎えました。私は夏には記念の夕顔を植えます。そして、初孫をひざに乗せて抱き締めながら、花の咲く音を聞きたいと思っております。

金光教放送センター

ある女子大で教壇に立っている友人が聞いてきた。

「最近の女性は結婚もしたくない、子どもも欲しくない、という人が多いが、その理由は何だと思おう？」と。

「うーん、何だろう。お金がかかるからかな。それとも自分の時間が取られて面倒くさいと思うんだろうか。」

すると友人は、「そういう理由もあるが、ダントツは、『子育てしている大人がうれしそうでない。』

楽しそうでない。そんなにしんどい結婚や子育ては、したくない』ということなんだ」と言った。

この質問は、入学したばかりの女子大生に毎年しているらしい。そして、決まっていつも同じ理由が返ってくるという。

若い人たちの身勝手さを責めるような気持ちでいた私は、不意に手痛い反撃を食らった気がした。正に、親の背中、大人の背中を見て、子どもは育つのだと、改めて思い知らされた。

私たち夫婦は、子どもにどう見られているのだろうか…。

私たちも結婚して30年を迎えた。その30年前の披露宴の席で、ある人生の先輩がニタツと笑って言った

て下さった。「今日は、夫婦学校入学おめでとう！
2人揃って、夫婦学校に入ったんだから新入生として、一年一年、良い関係を築いて進級して行って下さい」。

その先輩は、続けて奇妙なことを尋ねた。

「ところで、夫婦学校の算数では『1+1が4』になるのを知っているかい？」

「えっ！ それはどういう計算ですか？」と聞き返すと、その訳はこういうことだった。

「お互いを思いやる良い夫婦は、自分の力に相手の力も加わって、1人で2の力になっている。その2の力同士が足し合うわけだから4になるんだ。逆に、悪い関係の夫婦では『1+1がゼロ』になる。お互いに相手の力を削ってしまうから、足しようが

ない」

なるほど、夫婦学校はなかなか難しそうだな、と思いつながら神妙に聞いたのを懐かしく思い出す。

この30年を振り返ってみて思うことがある。よくけんかもしてきたが、よく謝ってもきた。けんかの後、いつも心にわき上がってくる「悪かったな」という思いを、素直に言葉にしてきたのである。大方、短気で大きな声を出す私の方が悪い。それでも、謝り続けたおかげで、ゼロにはならず、1くらいには留まってきたように思うのである。

3人の子どもの出産に進級進学。あの阪神・淡路大震災で全壊した家の新築。そして、親の介護に死別、子どもの結婚に孫の誕生と、その節々を夫婦で取り組み、時にはけんかしながらも、「1+1」が、

できれば4になるよう努力してきた30年であった。

4年前のことだ。長男の結婚式前夜、私は長男と杯を交わした。すると、長男の幼い頃の話に花が咲いた。彼が言うには、当時の思い出の大半は、私が大声で妻を叱るのが、とても怖かったことだという。子どもに心配ばかりかけてきたんだなあ、と反省させられた。

そんな話をしながら飲んでいると、いつの間にか日付も変わり、だいぶん酒の量も増えていた。そこで、長男が照れ臭そうに、酔いに任せて言った。「僕たち2人、お父さんたちのような夫婦になります。じゃ、お休み。明日よろしく!」と。私は泣きながら「ありがとう…、ありがとう…」と何回も言いつつ寝たらしい。

北国に住む2匹のヤマアラシが、寒さに震えて体をすり寄せる。すると、互いの針が当たって痛い。

それでも、体をすり寄せないと凍えて死んでしまう。寄り添っては離れ、寄り添っては離れしていくうちに、適当な距離が分かってくるようになる。

いつか、知人からそんな例え話を聞いたことがある。そして彼は言った。「お宅の家族は、みんなが、いつも『ありがとう!』と言い合っておられるので、感心しているんですよ。感謝の言葉が、良い距離を保つコツなのかも知れませんか」と。

たとえ夫婦の間でも、兄弟の間であっても、「ありがとう」と言える家族でありたい。それは「お世話になって生きているのが人間」だからだ。

子どもは親の背中を見て育つという。決して立派

とは言えない私たち夫婦の背中を、3人の子どもたちはずっと見てきた。

金光教放送センター

笑顔のワケ

そして、今は孫も見ている。私たちの背中を見て、孫は何を感じ、何を思うのかは分からないが、孫と共に育つおじいちゃん、おばあちゃんになりたい。

幼稚園に行く孫が言った。「おじいちゃん。大きくなったら何になりたい?」。ものすごく戸惑ったが、それでもいろいろ考えていたら、何だかワクワクしてきた。

よし! 今度は孫が「おじいちゃんたちのような夫婦になります!」と言ってくれる日を楽しみに長生きするか!

朝、登校しようと慌てて家を飛び出そうとした小学生の娘に向かって、「カッパを持って行きなさいよ。台風が来ていて、午後は雨になるから」と、妻が強い口調で言った。

外はとてもいい天気で、青空にお日様が輝いていた。そばで聞く私も、「:さすがに今日は雨なんか降らないだろう:」と思うほどである。ただでさえ急いでる娘には、納得できない母親の言いつけであろう。しゅしゅ部屋へ取りに行き、ふてくされた顔をして、家を出て行った。おそらく友達も誰もカッ

パなど持っていないだろう。そう思うと、私は娘に同情するのであった。

「今日はいらんよ」と、余程言おうかと思ったが、それを言えば妻と真っ向からぶつかると。娘には可哀想だが、グツとその言葉を飲み込んだのであった。

そして、娘が戻るころにはハッキリ分かることだと思っ

た。ところがである。あろうことか、昼前から雨が降り出した。私はビツクリした。つくづく言わなくて良かったと思っ

た。「カツパを持たせて良かったね」と妻に言い、「よくぞあの時、私の口を封じて下さいました。ありがとうございます」と神様に手を合わせた。

「ただいまーっ」と元気な声

がした。黄色いカツパを着た娘の笑顔がそこにあっ

た。その年は台風の当たり年で、全国各地で被害が出た。6月下旬には、私の住む街も大きな台風が通過していった。

友達の山田さんは、その日、仕事を終え、駐車場に戻ると、強風に飛ばされた大きな街灯が車の真上に落ちていたそう

だ。フロントガラスを中心に、前半がひどく壊れていたら

しい。実は、山田さんは、その2カ月前に、自動車保険の更新があり、その時、担当の保険屋さんから、「よろしければ車両保険の追加はいかがですか」と勧められた。今までなら断るのに、その時は、素直にその話が聞け、「そうだなあ」と前向きに考え、2万

円の増額にもかかわらず追加することにした。

そんなことも忘れていた矢先に、台風で車を破損したのだった。その修理に、さっそく例の車両保険が利用できることになり、高額な修理代金の全額をその保険で支払うことが出来た。

「まさか、この保険のお世話になるとは思いもしなかった。何か神様が手配して下さったようだ」と山田さんはニコツと笑って話してくれた。

婆ちゃんが、何やらうれしそうに私の部屋にやって来て、話し込んでいった。

昨日、病院へ定期検診に行き、いつものように、血圧やコレステロールの薬をもらってきたのだという。

普段は気にもしないのだが、その日に限って、ふと、薬の説明書を読んでみる気になった。一つ一つ丁寧に薬を並べながら読んでみると、中に一つだけ、見たことのない薬が混ざっていることに気付いた。「おや？」と思い手に取ると、それは口内炎の薬だったというのだ。どうやら婆ちゃんのご機嫌悪い原因はこれのようだ。

実は4日前の朝のこと。「あっ、しまった！」と思った瞬間に差し歯が抜け落ちた。「あれっ！どこへ行ったかな？」と探して、やっとこさ見つけたし、早速その日に治療に行つて歯を入れてもらった。ところがその噛み合わせが悪く、口の内側を噛んで口内炎が出来、痛くて困っていたのだ。

「これは有り難い」と、早速その口内炎の薬で痛

みを取り除くことが出来、楽にならせてもらったと
いうのである。おそらく定期検診の時に何気なく言
ったことを聞いて、お医者様が気を利かせて下さっ
たのだろう。

「頼んだわけでもないのに、今、一番使いたい薬
をちゃんと頂いている。しかも、いつもは見もしな
い薬の説明書を読んで、そのことを分かせてもら
えた。まったく不思議なことで、神様が手を打って
用意して下さったとしか思えない。有り難いことじ
や」

婆ちゃんは、うれしくて、誰かに聞いてもらわず
にはいられなかったようだ。

婆ちゃんは思い出すように話を続けた。「私もな

あ、4人目の子を身ごもった時は、生活も苦しくて、
産むか産まないか迷ったことがあった。教会へお参
りして先生に相談したら、『世の中には欲しくても
授からない人もたくさんある。せつかく神様に頂い
たのだから、産ませてもらいなさい』と言って頂き、
産む決心をした。そうして産まれた子が、あんたの
お母さんだった。ところが、末っ子のその子が思い
もかけず、我が家の跡を取ってくれ、男の子まで産
んでくれた。それがあんたじゃ」と、目に涙を浮か
べながらそう話し、部屋を出て行った。

「先のことは誰にも分からん。けど、『神様、こ
ういうことだったのですね』と後になって分かる時
が来る」というのが婆ちゃんの口癖。ただ運が良か
っただけじゃない。「私は神様に守られているんだ」

という思い。そして、あふれる笑顔。そういう人た

ちだからこそ幸せが運ばれてくるのかも知れない。

夏休みの体験

金光教放送センター

「おじさん、魚にエサをあげてもいいですか」

夏休みも間近となったある日、都会に住む小学五年生の親せきの子どもから、山あいの町に住む我が家に、かわいい電話が掛かってきた。

夏休みの数日を、彼と、弟と母親の3人が、こちらで過ごしたいと言うのだ。さて、何をして楽しんでもらおうか。

2年前、初めて親子でやって来た時、当時、4歳の次男達也君は人見知りが激しくて玄関から一步も

家の中に入ることが出来ないでいた。何と彼は、幼稚園へ行くにも、お母さんと離れられなくて、普通に行けるようになるまで1年以上もかかったという筋金入りらしい。

実は私、数年前から、趣味と実益を兼ねて、家から7キロ程山に入った所で、淡水魚のあまごの養殖をしている。そこには7千匹余りのあまごの他、ニジマスやチョウザメ、そして人にトコトコとついでくる人懐っこいニワトリも数羽いる。さらにイノシシも2頭、檻（おり）の中で飼っている。

なぜか、私には壁を作らない達也君を、兄ちゃんと一緒にその養魚場へ連れて行くことにした。一緒に魚にエサを与え、ニワトリが産んだ卵を探して集め、イノシシにエサを与える。そんな生き物との触

れ合いが、一気に達也君の心を開いたようだ。そうして家に帰ると、スーツと家の中に入って来た。やれやれだ。

翌朝、いつもは軒スズメの「チュチュ、チュチュ」のにぎやかな朝のあいさつの声で目を覚ますのだが、今朝は違う。子どもたちが部屋の前を行ったり来たりしている。昨日、朝早く魚たちにエサをあげに行くと伝えておいたので、置いて行かれないように待っているのだ。

子どもたちを連れて養魚場へ向かう。まずニワトリ小屋の戸を開ける。ニワトリたちは、めいめいに卵の産み場所に散らばって行く。あまごにエサを与えると、待ってましたとばかりに、バシヤバシヤと

勢いよくエサに食いついてくる。元気な証拠だ。イノシシも、「ご飯だよ」と呼びかけると、大きな凶

体に似合わず、小さなしっぽを振り振り近寄って来る様は、何とも可愛いものだ。エサをあげると、優しい目を時々こちらに向けながら食べる。サンキューの合図なのだろう。そうこうしているうちに、ニワトリが卵を産んだ気配が伝わってくる。「探しておいで」と言うと、子どもたちはあちこちに産んだ卵を草むらの中から見つけ、「あった、あった」と喜んで取って来る。そんな一つひとつのことが、子どもたちには、おもしろくてたまらないようだ。

生き生きとして「ただいま！」と言って帰って来る。なかなか家に入ることが出来なかった昨日とは大変身だ。自然のいのちから元気をもらったようだ。

滞在中の4日間、子どもたちの早朝の勤めは、休みなく続いた。

そんな体験がどのような形で子どもたちの心に残っていたのだろうか。今年の夏休みは家族でどこへ行こうかと話し合うと、「絶対、おじさんとこへ行く」と言ってくれたそうだ。

今年は5年生と1年生になっていた。「こんにちは」と言って真っ先に入ってきたのは、あの達也君だった。一段と成長した子どもたちを見て、今回は遊びを兼ねて仕事を手伝ってもらうことにした。

養魚場の一つの池の中のあまご1千匹余りを網ですくって隣の池に移し、ブラシと噴射機で池を洗う。そうして磨きあげた池にまた魚を戻す作業を次々と

していくというものだ。

子どもたちは思った以上に働いてくれた。大人にひけを取らない仕事振りだった。魚をすくうのは、文句なく楽しいようで、張り切ってやってくれた。

子どもたちは役に立てることがうれしいらしく、「次は？」、「次は？」と、指示を待ってくれる。もつとも、カニを見つけたり、オタマジャクシを見つけたりしては道草をくっているが…。

大人も子どもも楽しくやっているうちに、仕事遊びになった。遊びが立派な仕事になった。一人ではなかなか根気のいる作業だが、みんなの力が合わさると、こんなにも楽しいものなのだ。綺麗な池に泳ぐあまごはともうれしそうだ。

昼食は近くの谷であまごを焼いたり、竹を割って、

組んで、器も作って、そうめん流しをする。「外で食べるご飯、おいしいね」は、みんなの実感だ。

「あれ、おじさんはあまご食べないの？」

「うん、おじさんは食べないんだ。あまごは可愛いらな。でも、みんなは、おいしく食べてくれるとうれしいよ」

「フーン」

という一幕があった後、あまごを食べる時には、

「あまごさん、ごめんね。ありがとう」という言葉が男の子たちの口から出るようになった。

こうして、今回の滞在が終わり、親子は帰っていった。

後日、兄弟からハガキが送られてきた。たくさんあまごが泳いでいる絵の下に、大きな字で、「来

年も絶対に行きます」と書かれていた。

君も家族だよ

金光教放送センター

わが家を建て替えることになった。念願の新築だ。とてもうれしいことなのに、住み慣れた家を取り壊すのは、さすがに寂しい。片づけや引っ越しも大変だし、仮住まいの不便さにも参ってしまう。けれども、ボクたち家族よりも困っているのは、どうやら、犬のクッキーのようだ。

クッキーは、小型犬のオス。13年前にわが家に来て来た。家の中で犬を飼うなんて大反対だったボクが、一目会ったその途端、一番乗り気になった。何だか、よくある話だ。

今ではよたよたの老犬だけど、それでも、街行く人がたいてい可愛いと言ってくれる。そのクツキーは、これまでは、前足でドアを開けて、所定の位置の自分のトイレでちゃんと用を足していた。とつてもお利口なのだ。ドアには丸く、前足の跡がくぼみのように付いていたほどだ。

クツキーにとつても、そんな愛すべき我が家が無くなった。何せ老犬。今さら新しいトイレの場所を覚えるのは面倒なようで、散歩に連れ出さないとおしっこをしない。散歩すると家のあった場所に帰りがたがり、「どうしてボクの家が無いの？」と、不思議そうに工事現場を見つめている。そんなクツキーは、ボクら人間以上に頑張っているのかも知れない。

工事中は、仮の住まいに引っ越しだ。ところが、

やっと見つけたアパートはペット禁止だった。これには困った。クツキーはボクたちと一緒にいないと寂しがるのだ。「仕方ないなあ。大事な君のためだ」。ボクは家族とは別の所で、クツキーと寝泊まりすることになったのだった。

ボクがこの犬を大切にするのは、単なる犬好きと
いうだけの理由ではない。

実は、クツキーが家にやって来て間もないころのこと。ちょっと目を離れたすきに、突然外へ飛び出して、バス通りで自動車にはねられてしまったのだ。

鼻から血を流してぐったりとしているクツキーを抱きかかえて、ボクは必死で動物病院に走った。前歯は折れ、体は全く動かない。何とか命は取り留め

ることが出来ただけれど、頭や腰を打ったのか、後ろ足に損傷があり、目もうつろだ。お医者さんからは、「重い後遺症が残ることを覚悟して下さい」と告げられてしまった。

小学生の息子と娘も、悲しくて泣いてばかりだ。

それから、おしめを当てたり、水をスポイトで飲ませたりと、懸命の介抱が続いた。しかし、「こんな動けない犬を、どこまで面倒見なくてはならないのだろうか」という思いがよぎってしまう。ボクは、子どもたちに「クッキーがこのまま動けなくても、ちゃんと面倒を見て可愛がる事が出来るかい？」と、問いかけた。すると、「せつかくうちに来た子だもん。家族だからね」と答えてくれた。その言葉にボクは、クッキーに対する子どもたちの思いの深

さを、改めて知った。

「そうだ、家族だ。犬だと思わずに、我が子のよう大切にしよう。どんなケガや病気でもあきらめてはいけない」と思った。子どもたちも一生懸命、神様に祈ってくれた。

その後、クッキーは、お医者さんに補助車を作ってもらった。おかげで、外へ散歩にも行けるようになった。前脚だけで懸命に走る姿は痛々しく、悲しい気持ちになることもあったけれども、それがリハビリになる。車を付けないと、後ろ脚を引きずる癖がついてしまうからだ。その甲斐あって、だんだんに後ろ脚で立とうとするようになり、ついには四本の脚で立ち上がることが出来たのだ。あの日のことは忘れることは出来ない。そんないきさつで、ボク

は、クッキーをことのほか大切にすのだ。

この夏、引越しや仮住まいの疲労から、ボクはドクターから静養を言い渡されてしまった。仕方なく休んでいるボクの傍らで、クッキーが眠っている。昔はよくほえたのに、今ではほえるもおおっくうなのか、ほとんど一日中眠っている。よくこんなに寝てばかりいられるなあと思つて見ていると、昼と夜では寝方が違うことに気づいた。夜は、少しの物音でも、パツと起きて、周りを見渡し、小さいながらも番犬の役目を果たそうとしている。その分、ボクたちが起きている時間帯は、安心してお腹を見せていびきをかいて熟睡しているのだ。

そうだ、君がこうして安心して眠れるように、ボ

クも君がいてくれるから、安心していられる。安らぐつて、こういうことなんだ。

時折、「くんくん」と寝言を言う。君はいつたいどんな夢を見ているのだろうね。小さいうちから親犬と離れて生きてきた君にとって、ボクたち人間は本当の家族なんだ。犬はもともと群れをなして生活する動物だ。リーダーと認めたものを中心に集団を整える。だから、家族間の関係を見極める力がある。と聞く。自分勝手に生きている近頃の人間よりずつと家族を大切にするのかも知れない。

家族は、時には煩わしいこともある。人の数だけ問題も起こるし、ケンカもする。自分の都合通りには行かないことばかりだ。けれども、それでこそ家族なのだ。普段は気付かないけれども支え合つてい

る。だから安心して暮らすことが出来る。そんな家族の大切さをクツキーは教えてくれる。

ボクが情けない思いしていると、じつと顔を見つめる。

「君はボクの気持ちができるのかい？ 君は本当に手が掛かるけれど、ボクも君と同じだね。こうして家族に心配をかけているのだから」

歯が抜けて、目は白内障。ヨタヨタして電柱に頭をぶつける。耳も聞こえにくいのかも知れない。けれども、老いても、病気になるっても、一緒にいよう。家族なのだから。

よい方をあげよ

金光教放送センター

「どんな物でも、よい物は人に融通してあげれば人が喜ぶ。それで徳を受ける。人に物をあげる時でも、自分により物を残しておくようなことではない。たとえ前かけ一枚でも、よい方をあげ、悪い方を自分が使うようにせよ」

これは金光教の教祖、金光大神の教えの一つです。今日はこの教えについて先生にお話を伺います。

聞き手 先生、よろしく願います。

先生 こちらこそ、よろしく願います。

聞き手 この教えでは「よい方をあげ、悪い方を自

分が」ということですが…。

先生 ええ。まあ、なかなかそうはいかないです

けどね。欲を放すというのは、すごく勇気が要ることですから。

聞き手 私、このことで苦い思い出があまりまして…。

先生 ほう。

聞き手 大学生の時なんですけど、夏に花火大会が

ありまして、友達と浴衣を着て、2人で一緒に見に行くことになったんです。

先生 はい。

聞き手 でも、私も彼女も、帯の結び方が分からな

いので、私の母に着せてもらおうという話になったんですね。それで、彼女は浴衣を

持ってうちにやって来たんですけど、肝心

の帯を忘れてきちゃったんです。

先生 ああ。で、どうしたんですか。

聞き手 今から取りに帰る時間もないし、うちにあ

る帯を貸してあげようということになったんです。で、新しく可愛い帯と、いかにも古くさい地味な帯とが2本あって…。

先生 さあ、どっちをとるか、ですね。

聞き手 私、その時は、もうこの教え、「前かけ一

枚でも、よい方をあげなさい」というの、聞いたことがあって知ってたんです。で、

これがパツと頭に思い浮かんだんですね。

でも、「新しいの使って」とは、どうしても言えなくて、それで、「どっちがいい？」

って。

先生 分かりますねえ、その気持ち。それでどう
なりました？

聞き手 彼女の方が、「私、これ」と言って、迷わ
ず古いのを取ったんです。

先生 友達の方が遠慮して気を利かしてくれた、
と。

聞き手 そうなんです。私は内心、ほっとしたんで
すね。それで、私が可愛い方の帯を締め、
彼女は平気で似合わない帯をして、2人で
花火を見に行っただけなんですけど、それがいま
だに心に引っかかってるんです。彼女に悪
いことをしてしまったなあ、って。

先生 この教えを知ってるだけに、余計に気にな

ったんでしょね。それで、今も苦い記憶
として残っていると。

聞き手 そうなんです。

先生 よかったですね。

聞き手 え？

先生 私ね、教祖の教えというのは、自分を見せ
てくれる鏡だと思ってるんです。

聞き手 鏡…？

先生 誰も、なかなか自分の正体が分からないも
のですけれども、あなたは、この教えを知
っているおかげで、自分にはほんとは嫌な
ところがあるということはずっと心にとめ
ておくことが出来た。それが、これまでず
っと、生活のいろんな場面で、いい働きを

し続けたと思うんですよ。

聞き手　　そうでしょうか。

先生　　そうですね。自分はいいい人間だと思ひ込

んでる人と、本当は自分本位なところがあ
ると自覚している人。これは大きな違いで
すからね。

聞き手　　そう言っていたら、ちよつと気が楽に

なりました。それにしても…、この教えは、
ちよつと見ると簡単そうなんですけど、実
行しようと思ったら、難しいですね。

先生　　誰でも自分が可愛いですからねえ。少しで

も自分によい方を、と思つてしまふ。でも、
そういう心が、いろんな争いを引き起こし
たりもするんですね。

聞き手　　ああ、うちの子どもなんか、コップにジュ

ースを入れてやったりしますと、横から見
て、こつちが多い、あつちが多いと言つて、
よく取り合いをするんです。そんなの、ど
ちでもいいじゃないつて、思うんですけ
ど。

先生　　そうそう。神様からご覧になったら、きっ

とそんな感じなんでしょうね。神様にとつ
ては、人間みんなが、可愛いわが子なんで
すから、子どもの誰かが喜んで、それに
よつて他の誰かが泣いているようなことで
は、うれしくないですね。でも、自分から
進んでいい方をあげようとするような、兄
弟思いの子どもがいたら…。

聞き手 親としてはうれしいですね。胸がキューン

となつて、思わず抱き締めたくありません。

先生 そうでしょう。こんなうれしいことはあり

ませんよね。今の教えの中に「それで徳を
受ける」というのがあつたでしょう。

聞き手 はい。

先生 これは、神様に喜んで頂けるといふことな

んです。人と人が助け合つたり、親切にし
合つたりすることを、神様は人間の親とし
て、何よりも願つておられるんですね。

聞き手 私、子どもを見えますと、「もつと仲良く

してよ」つてもどかしく思うんですけど、
神様も私たちをご覧になつて、そんなお気
持ちなんでしょうか。

先生 まさにそのとおりだろうと思つてよ。

聞き手 ああ、そういう親の思いを想像したら、私

も神様にもつと喜んで頂けるようになりた
いな、という気がしてきます。

先生 教えの中に込められた神様の温かい親心と

いふか、人間に対する切ない思いや願い、
そういうものを味わつていきたいですね。

聞き手 はい。

先生 失敗しながらでもね。

聞き手 はい。先生、ありがとうございました。

先生 いや、こちらこそありがとうございました。

「どんな物でも、よい物は人に融通してあげれば
人が喜ぶ。それで徳を受ける。人に物をあげる時で

も、自分によい物を残しておくようなことではないけ
ない。たとえ前かけ一枚でも、よい方をあげ、悪い
方を自分が使うようにせよ」

金光教放送センター

今日はこの教えについて先生にお話を伺いました

当たり前前って、当たり前前？

「大きなことはお願いし、このくらいは構わない
ということはない。神には、大きいこと小さいこと
の区別はない。何事にも神のおかげをいただかなけ
ればならない」

これは、金光教の教祖、金光大神の教えの一つで
す。今日はこのみ教えについて、先生にお話を伺
います。

聞き手 先生、このみ教えによれば、大きいこと、

小さいことの区別はないんですよね？

先生 ええ。

に出来てしまったんですよ。

聞き手 でも、困ったこととか、辛いこととか、そ

先生 舌の裏側にですか。それは痛そうですね。

ういう「大きいこと」があるからこそ、神様にお願いするのではないですか？

聞き手 はい。話す時も、食べたり飲んだりする時

先生 そのとおりですねえ。困ったことや辛いこ

も、それに、口をすすぐ時でさえ、舌は口の中でいつも動いているんですね。だから、その度に口内炎が食べ物や歯に触れて、

とを神様にお願いするのは、とても大事なことです。あなたは、最近、何かお願いされましたか？

痛みが走るんです。とにかく、いつも痛むので、思わず「早く治して下さい」って、お願いしていました。

聞き手 そうですねえ…、些細なことのように聞こ

えるかも知れませんが、口内炎のことです。

先生 口内炎ですか。

先生 なるほど。口内炎はあなたにとって「大きなこと」だった、というわけですね。

聞き手 ええ。我慢しようと思えば出来るんですが、

聞き手 ホント、大変でした。何日も痛みが続くの

ピリピリと痛みが走って、嫌なものですよね。その口内炎が、舌、しかも、その裏側

で、だんだんと治して欲しいというよりも、「せめて、ちゃんと話したり、食べたり出

来るようにして下さい」ってお願いしていただきました。

先生　そうですね。口内炎のおかげと云っては何ですが、大切なことにあなたは気が付かれたんですね。

聞き手　え？ 何にですか？

先生　舌のおかげで、話したり、食べたりということが、何の意識もせずに出来ていたんですよ。そういう「当たり前」のことが出来るのは、すごいことだったんだ」と気が付かれたんでしょう。

聞き手　そうですね。あ、このみ教えでおっしゃっていることって…。

先生　口内炎といえは一見小さなことのように。し

かし、あなたには大問題だった。しかも、そこから見えてきたものは更に大きい。ですから、「大きいこと」「小さいこと」なんて、簡単には分けられないんです。

聞き手　なるほど、そうですね。思うようにならないことは「大きなこと」だと思ひし、放つておいても出来る、自分で何とかなると思ふことは「小さなこと」にしてしまひやすいんですね。

先生　そうですね。 「大きなこと」「小さなこと」を勝手に決めて、「こんなことお願いしなくてもいいだろう」というあり方は、自分の力だけで生きられるという、思い上がりからくるものです。事柄の大小

や、お願いすることしないことの区別をせず、どんなことでもお願いしていくことを、このみ教えからつかんでいただけたらと思います。

聞き手 はい。

先生 でも、その時に忘れてはならないことがあります。りましてね。

聞き手 はい？

先生 実は、私たちが願うより先に、神様の方から、私たちの助かり、立ち行きを願って下さっているんですよ。

聞き手 神様の方が先に願って下さっている…と？

先生 食べたりに、飲んだり、話したりという当たり前のことが、当たり前前に出来ていたのは、

神様が先に願って下さっていたからなんです。当たり前前って「大きなこと」ですね。

聞き手 そうですね。今、み教えについてのお話を伺いながら、「気が付かない細かいところ

ろにまで、神様の働きが及んでいたから、生きているんだな」っていうふうに思いが広がってきました。

先生 そう、その思いを、いつも持っていて下さいね。

聞き手 はい、忘れないようにしたいです。

先生 もう一つ、このみ教えにかかわってお話しておきたいのは、お願いをしているうちに、その祈りの中身が変化する、深まっていくということなんです。

聞き手 どういうことですか？

先生 これは、私の体験なんです、小学4年生

の時のことです。私は、小児ぜんそくの発

作に悩まされていました。発作が起こると、

いつも両親が背中をさすりながら、神様に

お願いしてくれていたのですが、ある晩、

自分でお願いしよう、と思ったんです。

聞き手 どうなりましたか？

先生 ゼーゼーという自分の呼吸音に耳を澄まし

ながら、「良くなりますように……」とお願

いしているうちに、「苦しいけれども、こ

の一息一息のおかげで、ボクは生きている

んだな」って、ふと思ったんです。一息吸

つても、「ああ、よかった。生きてる」、

一息吐いても、「ありがたいなあ」って、

そんな思いになることが出来、いつの間に

か眠っていました。

聞き手 先生はこの時に、「神様なしには生きられ

ないんだ」って気が付かれたんですね。

先生 はい。とても大切な、忘れられない体験で

す。今日のみ教えにあるように、どんなこ

とも神様をお願いしていくと、新しい世界

が開かれていくところが、信心の味わい、

面白みだなあと、私は思っています。

聞き手 信心って、奥が深いですねえ。今日、教え

ていただいたように、何でも神様にお願

いしながら生きていけば、もつと幸せに生き

られそうですね。先生、今日はありがとう

ございました。

先生 はい、ありがとうございます。

柱とのれん

金光教放送センター

「大きなことはお願いし、このくらいは構わない
ということはない。神には、大きいこと小さいこと
の区別はない。何事にも神のおかげをいただかな
ければならない」

今日は、このみ教えについて、お話をおうかがい
しました。

「建てた柱はたおれることがある。吊ったのれん
にもたれる心になっておかげを受けよ」

これは、金光教の教祖、金光大神の教えの一つで
す。今日は、このみ教えについてお伺いします。

聞き手 先生、このみ教えってどういう意味なんで

すか。よく分からないのですけど。だって、
柱って、しっかりしているものじゃあない
ですか。ご近所の新築工事の様子を見てい
ると、杭を打ったりして、随分しっかり立

てていますよ。「吊ったのれん」って、布のぶら下がっているあののれんですよね。

先生 そう、おもしろいでしょ。とても心がひかれるのです。まず、教祖様らしいなあと思

うのですよ。ちよつと、とんちのようですよ。

聞き手 へえー、やっぱりとんちなんですか。教祖

様って、どうしてそんな風におっしゃったんですか。

先生 それはね、私たちが当然こうだと決めつけ

ていることをひっくり返して、「本当にそうなのか？」と、問いかけておられるのです。大切なことを分かってもらいたいという切なる願いがあたりになったのです。ど

うしても幸せになってほしい。神様のおかげを頂いてほしい。だから、そのために、色々な例えを使つて説かれたのでしょ

聞き手 そうなんですか。そうまでして伝えたい大

切なことって、いったいどういうことでしょうか。

先生 では、み教えの内容に話を戻しましょう。

柱だってやはり倒れますよ。いいかげんな柱であれば建物は簡単に崩れてしまいます。これなら大丈夫と思っていた物が、案外大丈夫ではなかったということがあるのです。つまり、あなたは、生きていく上で何にもたれますか、ということですよ。「も

たれる」つまり、「頼りにする」ということ
とです。人間は誰しも弱いものですから、
何かに頼ろうとするのは仕方がないこと
で、けっして悪いことはありません。し
かし、何を頼りにして生きるか、その何か
が問題となります。まず、あなたの大切な
物を思い浮かべて下さい。

聞き手 えーっと、私は主婦ですから、こういう時
代になると生活が不安です。やっぱりお金
は頼りになりますよね。

先生 まあ、それはそうですね。もちろん、お金
はなくてはなりません。他には何を思い付
きましたか。

聞き手 私、困ったことがあると、いつも周りの人

に頼ってしまうんです。つい、家族や友だ
ちに甘えてしまつて、迷惑をかけることが
多いんです。それで、反省してしているん
ですけど…。

先生 それは、人を当てにし過ぎる、ということ
ですよ。人のお世話になることは大切なこ
とです。人のお世話にならずには人間は生
きていけません。お世話になることと、
当てにするというのは、ずいぶん違うので
すよ。では、健康はどうでしょう？

聞き手 そうですね。体が資本って言いますよね。
先生 あなた自身、以前、とても大きな病気をさ
れましたよね。

聞き手 はい、手術も長時間にわたりました。今で

はすっかり良くなりました。お医者様にも感謝しています。

先生 それほどの大病になった時、何が一番大切

と思いましたが。やはり、お金でしたか？

聞き手 いいえ。もちろん、治療や入院の費用の心

配もしました。主人にも申し訳なくて…。

でも、入院中は、何よりも子どもたちのた

めに、何としても生きていたい、という気

持ちでいっぱいでした。

先生 そうでしたね。手術が成功しますようにと、

一生懸命に神様にお願ひしてましたねえ。

聞き手 はい。あの時、このまま死んでしまったら、

今まで自分は何をしてきたのだろうか？ 何

が残るんだろうって思いました。お世話に

なった方にも、家族にも、何も出来ていなかったなあつて。

もっともつと人のお役に立てることが出来

たんじやないかなあと思いました。いくら

お金とか物があつても、あの世には持つて

いけませんからね。

先生 そうですね。お金や物は価値があつて、し

っかりしたものかというと、そうとも限ら

ない。

それに対して、心とか気持ちは、目には見

えませんが、頼りになるものです。入院

されていた時には、家族の優しさや思いや

りはうれしいものだったでしょう。

聞き手 ええ。入院中はみんなに支えてもらい、家

族ってありがたいなあと思いました。先生が神様に祈っていて下さったおかげで安心して受けられました。

先生 目に見えない、そんな頼りなさそうなものを頼りにして生きる。これはすごいことですよ。神様も同じですね。それを、教祖様

は、「吊ったのれんにもたれる心になっておかげを受けよ」とおっしゃっているのです。

聞き手 はい。ああ、そういうことですか。

先生 ですから、まず、日常生活の中で、私たちが目に見えないものにどれほど支えられているか、ということに気付くように心掛けましょう。木を見てご覧なさい。木の根は

目には見えません。けれども、地中にしっかり根を張っているから枝葉が栄えるのです。

聞き手 私たちは目に見えないものに支えられて生きていますね。

先生 そうです。そのことに気付いて、幸せだな

あと思うことが大切なことだと思います。そして、また、あなたの優しさや思いやりが、どれほど多くの人を支えていくか分からないのですよ。

聞き手 そうですね。目に見えないところをもっと

もっと大切にしていきたいと思います。先生ありがとうございます。

先生 ありがとうございます。

「建てた柱はたおれることがある。吊ったのれんに

もたれる心になっておかげを受けよ」

今日は、このみ教えについてお伺いしました。

水の恩

金光教放送センター

「水が毒というが、水を毒と思うな。水は薬という
気になれ。水がなくては一日も暮らせまい。水の恩
を知れ」

これは、金光教の教祖、金光大神の教えの一つで
す。この教えについて、先生にお話をお伺いします。

聞き手 先生、よろしくお願います。

先生 こちらこそよろしくお願います。

聞き手 まず最初に聞きたいんですが、水が毒とい

うのは一体どういうことなのですか？

先生

そうですね、今はあまり聞きなれないでしょうね。教祖様から教えを受けたこの方は、

行商をされていたのですが、胃腸が弱かった

ので行く先々で飲む水には特に気を付けていたのです。それで、上水道の無い時代の

ことですから、気を付け過ぎるあまり、

飲んでも大丈夫だろうかと不安に思い、ま

るで水を敵のように思っていたそうです。

聞き手

そうですね。でも先生、私でも水には

気を付けていますよ。子どもの頃は平気で

水道の水をがぶがぶ飲んでいましたが、今

はいったん沸騰させたものを冷まして飲んで

たり、出先ではミネラルウォーターをわざ

わざ買って飲んだりしていますよ。

先生

そうですね。環境破壊などが進んで、今は

教祖様の時代とは違った意味で、安全でおいしい水を頂くのも難しくなっているのか

もしれませんね。

聞き手

そのとおりですよ。しっかりお金は払って

るんだから、もっとおいしくて安全な水で

ないと困ります。

先生

あなたは水にお金を払っていますか？

聞き手

はい。ちゃんと払っています。

先生

確かにあなたは水道代は支払っているでし

よう。でも、それは水道の設備やそれに携

わる方々の働きに対して支払っているだけ

で、お水そのものにはお金を出していない

でしょう。

聞き手

そう言われるとそうです。あつ、思い当たることがあります。私の知り合いの方で、自分の家の庭に、最近、井戸を掘った人がいるんです。その人が自慢げに「うちの水は使い放題ですよ。それも、ただなんです」って近所の人に言ってるんです。そして、これ見よがしにじゃんじゃん使ってるんです。私は何かもつたない気がして……。

先生
あなたのお気持ちが大変なのです。まず、水は天地のお恵みだということをお分かってなければなりません。私たち人間はもちろん、色々な動物や植物も、命あるものは水が無くては生きてはいけません。それ程

大切なものであるにもかかわらず、それを

抜きにして、この水はいい、この水は悪い、ということとは思いがった考え方ではないでしょうか。教祖様は、ここるところをまづ伝えたくて、毒と薬という分かりやすい表現を使って教えたのではないのでしょうか。

聞き手
はい。

先生
教祖様から教えを受けたこの方は、一生涯、水を天地のお恵みとして頂き、水を悪く言わなかったそうです。

聞き手
えつ、それはどういうことですか？

先生
水あたりということや、水害という言葉も使わなかったみたいですね。水そのものが

決して悪いのではなくて、水は神様からの
お恵みと頂ききったのでしょね。まさに、

水の恩を忘れなかったでしょう。

聞き手
水が無くては生きてはいけない。そう言わ
れると本当にそのとおりですね。私も小さ
い頃、母に注意されたことを思い出しまし
た。

先生
どんなことを言われましたか？

聞き手
私が水を出したまま歯を磨いたり、顔を洗
ったりしているのを見て、「もったいない、
水を大切にしなさい」って何度も言われま
した。そのおかげで、今はこまめに蛇口を
閉めています。私の子どもたちは、やは
り水を出しっぱなしで使っています。これ

からはちゃんと注意していこうと思いま
す。

先生
そういう小さいところから意識していくこ

とは大事ですね。水は蛇口をひねればいく
らでも出ますが、天地のお恵みと有り難く
思い使っていくと、無駄遣いをしなくなり
ますよ。

聞き手
はい、分かりました。

先生
昔の話ですがね、お湯がたつぷりある温泉

に行っても、洗面器に3杯しかお湯を使わ
ない先生がおられたそうですよ。一緒に行
った方が、「ここは温泉だからどんなに使
ってもお湯は無くなりはしません。どんど
ん使って下さい」と勧めても、決して3杯

以上は使われなかったと聞きます。

聞き手

たったの3杯ですか？ どうやって洗うのかしら？ 私にはとても出来ません。

先生

私も無理ですよ。でも、その先生は水の恩に対するお礼や慎みの気持ちをも、そうやって表していたのだと思います。だからこそ、

お湯がたっぷりある温泉に行っても、いつものとおり、3杯しか使わなかったのです。

聞き手

そうなんですか。先生、私も工夫をします。

先生

それはいいことですね。でも、単なる節約に終わるのではなく、水へのお礼の気持ちを表していくことが大切ですよ。

聞き手

はい。水をお恵みとして大切に使用して頂

きます。

先生

それから水だけでなく、あらゆる天地のお恵みにも感謝していきたいですね。

聞き手

そうですね。先生、今日はありがとうございました。

先生

こちらこそ、ありがとうございました。

「水が毒というが、水を毒と思うな。水は薬とい

う気になれ。水がなくては一日も暮らせまい。水の

恩を知れ」

今日はこの教えについて先生にお話を伺いました。

金光教放送センター

おはようございます。小林眞です。

宮崎県にお住まいの30代のOLの方から、こんなお便りを頂きました。

私は会社の先輩から神経質だとよく言われます。

例えば、湯飲み茶碗を洗ったりする時、先輩は水でさっと洗って済ませるのですが、私は洗剤できちっと洗わないと気が済まないのです。「そんなことでも神経質ね」と笑われるのですが、こんなことがしよつちゅうあるのです。私からすると、逆に、先輩

の方が気遣いが足りなさすぎると思うのですが、どうしたらいいのでしょうか。

そうですか。それで神経質ですか。私はあなたにお茶碗を洗ってもらいたいですね。大抵の人は、どうしても自分を基準にして人のことを評価するので、大ざっぱな人からみれば、あなたは神経質に映るのかもしれないね。でも、人から「神経質だ」なんて言われると気分がよくないですよ。

私もどちらかというと神経質な方なのですが、若いころには、人からそれを指摘されて、ちよつといらついていた時期がありました。それで、そのころは、今のあなたと同じように、そんなことを言う人に対して、「あなたたちが無神経すぎるんだ」とい

つも思っていました。

同じ一つの事柄でも、人によって感じ方、考え方はまちまちです。夫婦や親子、兄弟であってもです。ですから、いろんな事柄に出会う度に、いつも、「自分は正しくて人が違う」というように思っていたら、衝突ばかりしてしまいます。やはり、人の意見もちよつとは聞いていく必要がありますよね。

それで私は、「ひよつとしたら、私は本当に神経質なのかもしれない」と思うようになり、それで、自分を素直に見てみると、確かに人よりは神経質なところがあるのがだんだん分かってきたのですが、そう自分のことが思えるようになると、例えば人から神経質だと言われても、もう反発する必要がなくなるんですよ。

実は、反発しようとするから、傷ついたり、面白くなかったりするんですが、素直に認めてしまえば、どうということはないんです。面白いもので、私の場合、「自分は神経質なんだ」と認めるにつれて、人から神経質だと言われなくなっていっただけです。

もつとも、神経質というのはあながち欠点ばかりではありませんよ。人の気が付かない、大切なことにも目が届くのですから。ただ、人よりはちよつと神経が細やかなので、余計なところにまで気が付いたりするんですが、私は若いころ、そんな時、すぐにそれを指摘したり、眉をひそめたり、人を軽く見たりしていたように思うんです。やはりこれではない人間関係は築けませんよね。みんなそれぞれ違う

個性を神様から頂いて生まれてきているのですから、それを認めていきたいですよね。

私は、どうしても気になって仕方がないことが起こった時には、「まあ、いいか。命に別状無いか」と、軽く受け流すようにしてきました。あなたも参考してみてくださいね。

次は東京にお住まいの30歳の男性から、こんなお便りを頂きました。

私の会社に金光教の信心をしている友人がいるのですが、彼はよく「神様のおかげ」という言葉を口にするのです。金光教ではどんなことを神様のおかげというのですか？

そうですね。「神様のおかげ」でなく、ただ「おかげ様で」という言葉なら、世間一般でよく使えますよね。あなたも使いませんか？ 例えば病気が良くなった時なんかには、「元氣になりましたね」「はい、おかげ様で」というふうに。

普段、何の気なしに使っているそのおかげ様って、誰のおかげ様をいつているのか考えたことがありますか？

もちろん、病院の先生や家族、みんなのお世話になって、というのもあるのですが、特別に病院にもかかってない、薬も飲んでない、それでも元氣になれば「おかげ様で」って言いませんか？

金光教には「信心はしなくてもおかげは授けてあ

る」という教えがあるんです。私たちはみんな、神

うのです。

様から空気、水を始めとして、いろんなお恵みを受けています。また、病気になった時、体の中から治そうとする働きが起こるのもその一つです。あなた

今まで当たり前と思っていたことが、実はそうではなく、「神さまのおかげ」なんだなあ、と気付くことが大切なんです。

は、痛い所があった時、特に手当てもしないのに知らぬ間に治っていたという経験はないですか？

例えば朝、目が覚めた時「ああ、今日も神様に命を頂いた」と気付けば、普通の一日が特別な一日になるかもしれませんよ。

一晩眠ると、前の日の疲れがすっかり取れていた。そんな時、元気な時には当たり前で済ませてしまうこともあると思うのですが、それを、「神様のおかげ」で良くなったと受け止める。当たり前で終わらせてしまうと、ありがたくもなんともない普通のことで終わってしまうのですが、それを「神様のおかげ」として受け止めると、ずいぶん違ってくると思

一般に「おかげ」というのは、信心することによって神仏の加護を受け、人間の願い事がかなうことをいうのですが、金光教では、それだけではなく、今述べたような働きすべてを「神様のおかげ」と言っているんです。

お分かり頂けたでしょうか。

あなたも一度、教会にお参りしてみませんか？
きつと、「あれもおかげ、これもおかげ、ありがた
いなあ」と思えることがいっぱい増えてくると思
いますよ。

金光教放送センター

おはようございます。石川教子です。

50代の女性からのお便りです。

私の知人は、熱心に金光教の信心をしていますが、
交通事故に遭ったり、夫の死、子どもの不登校など
と不幸が続いています。信心していても、次々と
問題が起きてくるものなのですね。しかし、彼女は
そのことに全くめげずに明るく生きています。どう
してでしょうか？という質問を受けました。

そうですか。どうして次々にそのような問題が起きてくるのでしょうかね。それも熱心に信心しているのにな。

しかしですよ、例えば来年の今日、自分がこの世に生きているだろうか、と考えてみると、絶対に生きていたとは言えませんね。だれにも言えないはずですよ。人間は生身ですから、思わぬ時にケガをしたり、患うこともありましょう。決して、自分がそうありたい、という通りには生きられないんです。それは、信心していても言えることです。

それにしても、どんな問題が起こってこようとめげない彼女は、大した方ですね。それまでの体験を通して、新しい問題が起こっても、きっとそこから

良いものが生まれけると確信しているのです。う。

こんなお話があります。

私の友達のお母さんは70歳を越えているのですが、スーパーマーケットからの帰り道、重い荷物を持つて、車の往來の激しい坂道を歩いていたんです。

その時、土砂降りの雨に見舞われました。無事に家に帰りついたその方は、「両足があるから歩ける。さらに、荷物が持てる。坂道が歩ける体力が私にはある。目が見えて、耳が聞こえるから無事に帰ることが出来た。私ほどありがたく、うれしい気持ちであの坂道を歩いていた者はいないのではないだろうか」と喜んだそうです。

土砂降りの雨の中でも、良いことを見つけて感謝するか、何で私こんな目に遭わなきゃならないのかと愚痴るのか、その選択の自由が私たち人間には与えられているんですね。その方は感謝することを選んだんですね。

良くないと思えるようなことが起こってきても、心の器を大きく育ててもらおうチャンスと心得て、逃げずに取り組んでいきたいものですね。そうすれば、どんな問題の中にも喜びを見つけることが出来るし、苦しんでいる人の心に寄り添うことが出来るようにもなってきました。それが本当に、いのちの喜びことではないでしょうかね。

きっと、あなたのお知り合いの女性もそうしておられるのだと思います。

もし、金光教についてお知りになりたいことがありましたら、どうぞお気軽に最寄りの教会をお訪ね下さい。

次に20歳になる会社員の女性から、私の祖母は、金光教の信心をしています。毎日朝晩、家のご神前で長い時間をかけて祈っています。祈るということにはどんな意味がありますか、という質問が寄せられています。

そうですね。信心する者にとって、祈りは欠かすことのできない信心実践の最も大切な営みの一つです。人間は自分の力で生きているわけではありません。祈りは、私を生かして下さっている神様と心を

通わす対話なのです。

祈りは、ただこちらの願いを一方向的に神様に向けるだけではなく、同時に神様の人を助けようとする思いを受け取っていかうとする営みでもあります。

あなたはご自身のことで真剣にお祈りをしたことはありますか。

祈り続けることによって、祈りの内容が豊かになってくるんです。始めは、自分のことだけを祈りますよね。でも、家族が幸せにならなければ、自分も幸せになれませんね。それで、家族のこと、身内のことへと、祈りが広がってきます。

そうしていると、知人、友人のことから、今すれ違ったあの方、この方のこと、やがて世界の平和に至るまで祈れるほどに心が広く大きく豊かに育って

いきます。

もう亡くなられた方ですが、熱心に信心をされてきた、あるおばあさんの話を紹介させて下さい。

その方が101歳の時、骨粗しょう症になり、背骨がつぶれて入院することになりました。そのおばあさんのお孫さんが見舞いに駆け付けました。

「おばあさま、寝たきりで退屈だよね」と気遣うと、おばあさんは、「私には生きがいがあるのよ。ここに来たら、お医者さまのこと、看護師さんのこと、お世話をして下さる方や、そのご家族のことをお祈りしていたら時間が足りないの」と言ったそうです。

その時、看護師さんが注射を打ちに来ました。と

ころがなかなかうまくいかない。何度もやった末に
ようやく出来たのですが、おばあさんは、「ありが
たいなあ。神様は、この動けなくなつて人の役に立
たなくなつた私でさえ、こうやつて看護師さんの練
習台としてお使い下さる。お役に立てて下さる。あ
りがたいなあ」と喜んだそうです。骨がつぶれて痛
い身でありながら、人が助かることを最高の喜びと
しておられるのです。

人が助かることを祈れることは、人生において最
も尊い大切な営みであると思われませんか。

祈るということには、そういう中身があるのです。
きつとあなたのおばあさんも、自分のことはもとよ
り、あなたのこと、ご家族のこと、知り合いの方々
のことを祈っておられることと思います。

どうぞあなたも自分のことを祈ることから始めて
みませんか。

こんなお便りです。

金光教放送センター

おはようございます。鳥越正克です。

佐賀県にお住まいの、30歳になる女性からの質問です。

恋愛結婚して5年になります。これからもずっと夫婦仲良く、家庭生活を続けていきたいと願っています。そこで私なりに、家庭に関する本を買って勉強していますが、色々な解説があり迷っています。金光教では夫婦円満の秘けつをどのように教えていますか？

あなたが家庭生活のあり方について、真剣に取り組んでおられることをうれしく思います。さて、ご承知のように、各分野の専門家が書いた本を始め、一般の方々が書いた体験談を含めると、膨大な数の本が出ていますね。それだけ人によって価値観が違うということですよ。

どれもそれぞれ大切なことが書かれているようですが、言い換えると、これが絶対とは言えないところがあるということですよ。ですからここでは、私が金光教の信心をさせていたどきながら、30数年にわたり取り組んできた家庭生活についてお聞きいただきたいと思えます。

私が結婚を決意した時に、父が、「神様のご縁を大切にせないかんばい。また大事な娘さんを頂くのだから、これからは、先方の親様に孝行せんといかんなあ」と言ってくれました。

私たち二人はお互いを見初め合って結婚したのですが、出会うということは、実は神様の賜り物であると、分らせて頂きました。

父の言葉を受けて、私は神様が結んで下さった夫婦であることを自覚し、これからの生活指針としました。

そして、妻がここにいてくれることは、妻の両親の大変な苦労があつてのことですね。ですから私は妻の誕生日がくると、妻の親に電話をして、「妻を産み育てて下さり、ありがとうございます。もう何

歳になりました」と、お礼を言うのです。その度に妻の母は、「こうまで言つて下さるのはあなただけよ。ありがとうございます」と喜んでくれます。更に、今は亡き私の両親の霊前にもお礼の報告をします。こうして、親あつての自分であると思えることが、夫婦が幸せになっていくことだと信じて、欠かすことなく実行しています。

実は、私の娘が近々結婚するのですが、その娘が、「結婚したらお父さん、お母さんのような夫婦になりたい」と言ってくれるのですよ。とてもうれしく思いました。

少しはご参考になりましたでしょうか。

それでは次に、大阪にお住まいの、52歳の女性か

らのお便りです。

近所に金光教を信心する女性がいます。その方が「めぐり合わせの悪い私だったけど、信心していくうちに段々とおかげを頂いてきたの。ありがたいわ」と、事あるごとに口にします。めぐり合わせという言葉が気になるので教えて頂けませんでしょうか？

このような内容です。

信心してご利益を頂くということは、どなたにも理解出来ることですね。でも、そこに、「めぐり合わせ」という言葉を使われると、「それって何なの？」と疑問を持たれることでしょうか。

金光教祖は、めぐり合わせについての教えの一つに、「父母に孝行が第一である。孝行をすれば末で

幸せになる。不幸をすれば末で巡ってくる」と、教えられています。これは、いのちを授けて下さっている神様の働きや、血肉を分け与え、産み育てて下さった両親への感謝を忘れると、結果として自ら立ち行かなくなる、と言っておられるのです。何事も、今ある本を大切にしていきたいものですね。

もう40年も前のことになりましたが、熊本旅行に行った時に、急に激しい雨に遭いました。せつかくの野外観光を中断し、一軒の野菜を売っているお店で雨宿りをしました。

不満を口にしてしていると、店のおじさんが奥に招き入れて、「ちよつと、これ食べてみらんね」と言つて、生のお米や野菜を薦めるのです。嫌々食べてみ

ると、これが意外やおいしいのですね。するとおじさんが、「野菜がみずみずしかろうが、雨に文句ば言つとるばつてん、あんたたちは水ば食べとるとばい」と言ったのです。ガン！ときましたよ。

人間という字は、人の間と書きますが、産まれ落ちてこのかた、どれだけ多くの人に支えられてきたことでしょうか。でも、油断していると、自分の思うどおりにしたいと言う欲にとらわれ、お世話になつている人たちにさえも不足に思うのも人の常ですね。

こうした不足の心持ちで生活を進めていくと、人間関係や事柄の上で困つたことを生み出します。それが悪いめぐり合わせといわれるものです。

あなたの友人である女性は、このことを理解された上で、不足ばかり言っていた生活から、すべてにお世話になつての私なんだ、と、心の向きが大きく変わっていかれたのでしょうか。こうして心のあり方が変わらされる中で、だんだんと良いめぐり合わせとなつていかれたのですね。

感謝することは、有形無形とたくさんあるはずで、す。気付こうとしなくては気付くことが出来ない天地のお働きやお恵みに加え、当たり前と思ひ過ぎしてきた人や物への不足を心よりお詫びしていくことです。

形で返すことの出来ない大きな恩は、感謝の心で返していきたいものです。

心の中を見つめに一度、教会を訪れてみませんか。

金光教放送センター

おはようございます。三矢田光です。

最初のご質問は、大阪にお住まいの、高校生の男性からです。

甲子園大会で、春2度、夏1度、大阪代表になった、金光大阪高等学校が、金光教がもった学校だと聞いて、金光教に関心を持つようになりました。今年は、金光教の設立記念の年だと、何かのニュースで見たのですが、金光教は、いつ、出来たんですか？

野球がもとで、金光教に関心を持って下さったうえで、ありがたいことです。金光大阪高等学校は、学校法人関西金光学園の中の一つの学校です。この法人は、ほかに、金光藤蔭高等学校、金光八尾高等学校、金光大阪中学校、金光八尾中学校を運営し、また、兵庫県赤穂市には、市と提携して、関西福祉大学を設立しています。この法人とは別に、岡山県には、金光学園高等学校と中学校とがあります。幼稚園もあります。金光教の歴史の中で、こうした人材育成の場が生み出されてきていることは、本当にありがたいことだなあと思うのです。

金光教はいつ出来たのか、というご質問ですが、それは、安政6年、つまり、1859年ということになり

ます。金光教の教祖様は、赤沢文治というお名前です。今の岡山県浅口市に生まれ育った農民でした。若いころから一生懸命努力して、経済的には豊かになっていったのに、家族が次々と亡くなり、ご自身も大きな病にかかって、命が危ういといった体験の中で、神様に出会われ、人が助かる生き方をつかんでいかれたのです。

教祖様のもとには、だんだんと、いろんな人が訪ねてくるようになりました。悩みを打ち明け、教祖様のお話を聞いているうちに、元気がわいてきて、どう生活すればいいかがはっきりしていったのですね。「文治さんの話を聞くと、苦しみが助かる」と評判になり、遠い所からも、人が来るようになってきました。

やがて、忙しくて農業も出来なくなり、安政6年のある日を境に、農業をやめて、神様の前に座って参拝者の願いを聞くようになられました。それを、金光教では、立教の日としております。今年、立教150年の年になります。

その教祖様に助けられた人の中に、白神新一郎という方がいました。この方は、現在の岡山市で米問屋を営んでいましたが、商売を息子に譲り、還暦を過ぎた高齢で、たった一人で大阪に出て、明治12年に、金光教の道伝えを始めました。ですから、あなたが住まいの大阪で、金光教は、ちょうど130年になるんですね。

また、野球だけでなく、各学校の生徒さんたちは、

いろんな分野で活躍しています。学校は、それぞれ特色ある教育方針とカリキュラムを持っていて、先生方は本当に親身になって生徒さんたちの成長を見守ってくれています。それぞれホームページを持っておりまして、ぜひ、一度ご覧下さい。

さて、次のお便りは、東京にお住まいの、60代の主婦の方からです。

息子が2人おりますが、それぞれ違う政党を支援する団体の活動に参加するようになりました。もとは、仲の良い子たちだったのに、お互いの政治団体の主張を説明するうちに、口論のようなことになり、息子同士も、その家族同士も、関係がぎくしゃくしてきました。私に、それぞれの団体の会員になるよ

う勧めるのですが、どちらかに入会すれば、もう一人は気持ち収まらないと思います。どうしたらいいのでしょうか？というご相談です。

政治上の活動や考え方から、息子さん同士の仲が悪くなってしまったとのこと、さぞ、お心を痛めておられることとお察しします。

金光教の教祖様が、こういうみ教えをしておられます。「人のことを悪く言う者がある。神道はどう、仏教がこうなどと、悪く言ったりする。自分の産んだ子供の中で、一人は僧侶になり、一人は神父になり、一人は神主になり、また、役人になり、職人になり、商人になりというようになった時、親は、その子供の中でだれかの悪口を言われて、うれしいと

思うだろうか。他人を悪く言うのは、神の心になわぬ」。

今のあなたのご心境に通じるものがあるように思えます。政治というものは、その国や地域の人々が幸せに生活していけるよう、制度と運用を整えていく働きですが、いったん、主義主張や立場が定まると、どうしても、ほかの立場と対立していきます。

息子さんたちは、それぞれ、正しいと思うものを見つけ、一生懸命活動しておられるようで、それは、結構なことであると思うのです。

しかし、子ども同士がお互いをけなすようなことでは、親として、こんなにつらいことはありませんね。あなたからすれば、政治的な立場だとか、どちらが正しいとかいう前に、お二人とも、あなたの子

であるということ、子どもどうし、お互いを尊重し合い、家族同士も仲良くしてほしいということ、そのことが大切なことであり、優先されることなのですね。どうか、そのことを、まずは、あなた自身の心の中で、はっきりさせて下さい。そして、お子さん方にも、その願いを伝えていくことが大切なのではないでしょうか。どのように話したらいいかわからないようなら、どうか、お近くの教会を訪ねて、相談してみてください。ご関係が良くなっていくことを祈っております。

KONKOKYO

金光教本部 ラジオ放送係

【住所】 〒719-0111

岡山県浅口市金光町大谷 320

【電話】 0865-42-6453

【FAX】 0865-42-2114

【メール】 w-master@konkokyo.or.jp